

## 日本日中関係学会＜青年交流部会＞ 2020年度活動方針

日本日中関係学会青年交流部会  
部会長 高久保 豊

### 1. 2020年度より第2ピリオドが始まり、部会長が交代致しました。

### 2. 運営スタンス

青年交流部会の第1ピリオド（部会長：杉本勝則理事）では、中国留学生を主な対象とし、その他の有志学生も含め、著名人による文化・制度・内外情勢に関するプレミアム・レクチャーと体験をコアとした活動を展開し、回を重ねて成果を上げてきました。

2020年度からの第2ピリオドでは、これまで蓄積された経験を踏まえ、日中関係学会ならではの事業内容を中心に、若者に光を当てた交流プラットフォームとして「若者の声に耳を傾け、若者が主体として動ける側面支援のしくみ」を構想する。「参加者の思いを軽やかに受容しうる受け皿」を心掛け、できたものを評価しながら育んでいきたい。スローガンは「若者主体、若者目線」です。

### 3. 組織化のプロセス

#### (1) 若者主体に向けた留意点

若者メンバーとのチューニング（周波数合わせ）に留意する。彼らの関心は、日中関係そのもののほか各自の専門領域、日本語力向上、就活・人脈関連、国際交流活動、文化理解全般など様々です。目標探索中の若者も多数いるので、ひとつの組織としてまとめるには、メンバーの多様性を許容したうえで、求心力を持つ“趣旨の提案”が必要となる。同時に、若者リーダーは他の活動で多忙であり、アルバイトも余儀なくされていることに留意が必要である。わざわざ類似の日中交流活動を新たに作るのは、イベントの競合となりかねず、適切でない。こうした事情から、無理なく続けられる仕組みであることと、多くの人に共感される日中関係学会独自のコンセプトを明快に提示することが求められる。

#### (2) スタート段階の進め方

今後どのように活動を育てていくのか、若者たちを中心に活発な意見交換を進めていきたい。まず、すでに8回を重ねた宮本賞応募経験者を中心に有志を募り、若者層に呼びかけて「顔合わせ会」を行い、今後の事業内容を具体的に話し合う予定。スタート段階では以下のAとBを柱としたい。

#### A <ネットによる交流>

- ①wechatグループ「破冰会」（34人登録済みの「【日中関係学会】宮本賞交流会」の充実）
- ②宮本賞受賞者との感想文交流のスタート
- ③若者による日中事情レポート交流のスタート
- ④日中関係学会または関連諸団体とのネットコラボ（相互参加の促進など）

#### B <リアルによる交流>

- ⑤定例交流会（年2回；毎回1～2組の話題提供＋懇親タイム）
- ⑥宮本賞表彰式前の交流合宿イベントのコラボ
- ⑦日中関係学会または関連諸団体とのリアルコラボ（イベントの共同開催など）
- ⑧青年交流部会事務局・幹事会ミーティング（随時開催；希望するメンバーのオープン参加可）

(3) 学会会員全体との一体感の醸成

青年交流部会の魅力の鍵は「誰がどんな形で参加できるのか」にある。A<ネットによる交流>を軸に加え、中国からの受賞者もこのプラットフォームを通じて青年交流部会員として参画できるようにする。また、老・壮・青のマッチングが軌道に乗れば、一般会員にもメリットが感じられるようになる。

(4) 活動のスピリット (趣旨の提案等) (草稿)

VP(趣旨の提案)	相互理解を尊重する人材育成の応援プラットフォーム
事業システム	若者主体のチューニングを心掛け、ミスマッチを起こさない
\$ (資金の源泉)	できる範囲で学会が負担を行い、参加者に無理をさせない

☞趣旨に賛同する若者を主体とし、中高年がメンターとして活躍。

4. 実行委員

(1) 青年交流部会の事務局・幹事会 (順不同・敬称略)

①事務局：<部会長>高久保豊、<部会副会長>三村守、内田葉子、劉永鶴(東洋大学教授)、朱杭珈、  
<アドバイザー>国吉澄夫、林千野

②幹事会：朱杭珈、陳星竹、方淑芬、ほか宮本賞受賞者を中心に、宮本賞投稿経験者、各大学やグループの若者に広く呼びかける。

新型コロナウイルスの緊急要請が解除された頃を見計らい、参加可能な青年若干名を交えた事務局・幹事会の打ち合わせを行い、活動方針について協議を行う。メール会議などを適宜活用する。

以上